The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	From Skepticism to Self-Parodies : The Transition in Joseph Conrad’s Works
Author(s)	Tanaka, Kazuya
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26236
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕From Skepticism to Self-Parodies: The Transition in Joseph Conrad's Works （懐疑からセルフパロディへ：ジョウゼフ・コンラッド作品における変遷）

学位申請者　　田中　和也

ジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）は、英文学における小説の「偉大な伝統」の構築者のうち一人であるとして、彼の作品は高く評価されてきた。だが、そうした批評史の基礎を築いたコンラッド研究の大家たちは、彼の前期作品を高く評価する一方で、1913年の『チャンス』*Chance*以降の後期作品には低評価を下してきた。低評価の理由として大家たちが考えてきた要因としては、コンラッドの創作技法の低下による語りの平板化がまず挙げられる。他にも大家たちの考えでは、コンラッドは恋愛描写や女性心理を描くのが巧みではなかったのに、後期作品ではラブロマンスがたびたび主要な題材となっていて、ゆえに後期作品にはコンラッドの才能衰退（decline）が体現されているというのである。大家たちのこうした主張の結果、コンラッド前期作品と後期作品の間には、作品の内容や技法において明確な断裂があると長らく考えられてきた。こうした「達成と衰退」（achievement and decline）の枠組みは、コンラッド研究において今なお影響力がある。その一方で、こうした「達成と衰退」理論に対抗して後期作品を再考察する試みも近年は出てきている。そうした試みにおいては、コンラッド作品全般に共通してみられる作品テーマや小説技法を模索する論や、あるいは後期作品が執筆・受容された時代的背景―後期作品は、女性読者を市場対象として大きく考慮していた―を重視する論などが登場してきている。

こうしたコンラッド批評史や英文学内での彼の立ち位置を踏まえつつ、本論文は、コンラッド作品は前期と後期という区切りでは、作品内容や技法面において安易には分けられないということを主張する。その主張に際して鍵となると私が考えるのは、コンラッドが同時代の社会的言説と自らの創作意識に対して、絶えず懐疑を抱き続けていたことである。彼の作品全般に一貫して共有されていた、自分自身と社会双方への絶えざる懐疑の結果、彼が才能を枯渇させることなく、創作意識や創作技法を絶えず刷新しつつ作品を書いていたことを、私は訴えたい。この結果、「達成と衰退」論を再考察することを、本論文は試みる。その試みにおいては、彼の作品を年代順に追っていき、コンラッドから社会や自己への懐疑が、最終的には彼自身が書いた初期作品へのセルフパロディになっているということを、私は考察したい。

まずはコンラッド初期作品について考察すると、彼の初期作品は海洋冒険小説の色合いが強いものが多い。この背景に存在するのは、彼自身が前半生を船乗りとして過ごしてそこで重視されていた船乗りたちの連帯感に魅せられていたことや、そもそも船乗りを目指したのも幼少期に海洋冒険小説を好んで読んでいたことである。だがコンラッドは、自らが憧れてきて体感してきた海の世界を、作品では手放しで称賛しているわけではない。彼の作品では、そうした海洋冒険小説が彼の時代に受容される下地となっていた、西洋植民地主義への懐疑とそれゆえの批判的距離が見いだせるのである。本論文では、第一章で『島の流れ者』*An Outcast of the Islands*（1896）、第二章で『ロード・ジム』*Lord Jim*（1900）を扱う。この二作品では、白人冒険者の失墜が描かれていて、植民地主義言説における白人の優位性が揺らいでいるのだが、その揺らぎ方が対照的である。『島の流れ者』においては、マレー群島における白人男性たちが主人公として描かる。だが私が重要視するのは、彼らの失墜そのものよりもその背後で活躍するマレー群島の策士ババラッチBabalatchiの役割である。作品半ばでは、白人男性主人公二人が対峙し結果として決別するという、プロット上で欠かせないシーンが登場する。だがその対決シーンまでには無駄な描写が数多く出てくると、『島の流れ者』の批評史では根強く言われてきた。そうした無駄に見える引き伸ばしシーンに出てくるのが、ババラッチなのである。ババラッチは、政治的感覚に溢れていて、なおかつ海の世界で鍛え上げられた冒険者として描かれる。ババラッチと白人主人公たちとの対比が引き伸ばしシーンで際立つからこそ、主人公たちの失墜が描かれると私は考える。一方『ロード・ジム』では、船乗りである主人公の青年ジムは冒険小説の主人公のように活躍したいと妄執している。ジムは作品前半で、船員免許をはく奪される失墜をおかす。だが作品後半では、マレー群島にあるパトサンPatusanでの冒険ののち成功者となる。こうした作品前後半での毛色の違いが理由で、『ロード・ジム』前半は高度な

小説技法を駆使しているのに、後半は平板な冒険作品になっていて、作品のテーマや技法において前後半で乖離があると長らく批判されてきた。しかし、ジムの成功が描かれている最中に、第36章では突如語り手の転換が起こり、全知の語り手が急に登場する。この第36章での急な語りの変化が存在するがゆえに、『ロード・ジム』では作品前半からして、ジムの英雄幻想をパロディ化する下地が周到に用意されてきたことが意味づけられる。ゆえに『ロード・ジム』では、作品前半と後半とでは断絶はないと本論文は訴える。

こうして海の世界やそこにおける連帯感ある世界に、コンラッドは懐疑を抱いてきていた。こうした懐疑はそのままコンラッドの目を、人々の連帯感が存在しない世界、すなわち都市とそこにおける政治へと向けさせた。こうした海から陸への作品世界の転換は、彼の政治小説の第一作である『ノストローモ』*Nostromo*（1904）において、題名役となっている主人公ノストローモが、船乗りでありつつも、都市内の政治的混乱に巻き込まれることで例示されている。本論文では、第三章で『ノストローモ』を、第四章では『密偵』*The Secret Agent*（1907）を論じる。この二作品を論じるのは、その対照性と共通性ゆえである。『ノストローモ』は政治的不安の只中にある発展途上国コスタグアナCostaguanaにある都市スラコSulacoを、『密偵』は政治的に安定して経済・文化面でも高度に発展した都市ロンドンを、それぞれ舞台としている。作品舞台の対照性の一方で、両方の作品ではともにプロット構成に円環性が見受けられる。この円環性ゆえに、いかなる政治的動きも、都市という連帯感無き世界では何も起こせないという点を両作品は読者に印象付ける。私は敢えて両作品で一人ずつ登場人物に焦点を当てて、その人物が作品世界の問題点を暴き出す役割を担うと主張したい。『ノストローモ』では、主人公とは対照的に描かれているモニガム医師Dr. Monyghamの役割に注目する。彼こそが、作品中盤でノストローモが一見不自然に人格を変貌する要因となっているのである。彼はまた、作品世界で懐疑と行動を最も両立して、革命という観念にとらえられた人々の不毛を暴きだす。だがそんなモニガム医師も、結局は自身が献身するグールド夫人Mrs. Gouldへ忠誠心という観念からは逃れられない。モニガムさえ観念に束縛される姿がゆえに、人間が観念と言う存在に絡め取られるということを、『ノストローモ』は表象するのである。一方『密偵』では、タイトルキャラクターであるアドルフ・ヴァ―ロックAdolf Verlocの妻であるウィニー Winnieに注目する。この作品ではテロ行為が題材となっているが、その内容は天文台の爆破という愚かなものである。なおかつ、作品第4章―テロ行為がおこなわれた直後のロンドンを描く章である－と最終章の第13章が、類似した場面設定をもっている。ゆえに『密偵』は、何事も起こりえないという都市の不条理やそこでの円環した日々を描いているように見える。だが、そうした不毛に見える不条理の連鎖の中心には、ウィニーから夫への無関心―ウィニーは彼の本当の職業を知ろうとしない―が存在している。また彼女の言行を一致させる人格は、彼女の自殺後にあたる第13章で登場する、口先だけのアナキストたちとは対照的であり、彼らの問題点を明らかにすると同時に、影響を与えさえする。こうした自身の影響力の結果ウィニーは、『密偵』の世界は不条理に円環するのみではないということを示すのである。

コンラッドの懐疑は、こうして都市世界を考察することにとどまらなかった。彼が都市という連帯感無き世界を考察したのち、その自省的懐疑はブーメランのように、彼自身に返ってくる。ゆえにコンラッドは、彼自身が過去に親しみかつ記してきた、海の世界を再び描くことになる。こうした海の世界への帰還の結果、彼は自身の作品を自らでパロディ化した形で描くことになると、私は考える。本論文では、第五章で『チャンス』*Chance*（1913）を、第六章では『放浪者』*The Rover*（1923）を、それぞれ論じる。『チャンス』は、出版当時の女性読者を念頭に置いて執筆されたという論が近年は有力で、その論はコンラッドが女性を描くのが下手だったという通説に一石を投じてきている。だが私が主張したいのは、実は『チャンス』は女性主人公の成長を一見主題としつつも、その背景では船乗りたちの連帯感が強調されているということである。これによりコンラッドは、前中期作品からは捻りをきかせた形で、海の世界や人々の連帯感を描いたのである。一方『放浪者』は、主人公が老練な船乗りであることから、60代になったコンラッドが海の世界に感傷的な憧憬を込めて書いたという評価がなされてきた。加えて、作品プロット上で無意味な脱線が多いという批判などがあり、作品価値が低く見積もられてきた。だが、実は一見脱線にしか見えない各要素は、主人公が物語最後に政治的ミッションのために出航していくシーンにおいてプロット上で結実していくと本論文は主張する。その結実に当たっては、コンラッドはリアリズム小説の技法を意図的に放棄しており、その上で主人公の出航シーンをそれとわかるほど劇的に描くことで、海の世界を際立たせている。コンラッドは、『放浪者』執筆に際して、海の世界とは自意識的に距離を保っていると意味づけられる。こうした自意識性のもとで海の世界は、白人たちの失墜が描かれる向きが強かった初期作品の批判的書き直しと解釈できる形で、登場している。結果として、コンラッドの創作意識は枯渇していなかったこと、彼の後期作品は「衰退」やセンチメンタリズムの現れではなく、前期作品から一貫してうかがえた懐疑の具現化であると、解釈できるのである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　田中　和也　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	服部 典之
	副 査	大阪大学　教授	森岡 裕一
	副 査	大阪大学　教授	片渕 悦久
	副 査	大阪大学　准教授	石割 隆喜

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：From Skepticism to Self-Parodies: The Transition in Joseph Conrad's Works

学位申請者　田 中　　和 也

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　服部 典之

副査　大阪大学教授　　森岡 裕一

副査　大阪大学教授　　片渕 悦久

副査　大阪大学准教授　石割 隆喜

【論文内容の要旨】

ジョウゼフ・コンラッドの作品は、リーヴィスなどの高名な小説研究者に高く評価されてきた一方で、1913 年の『チャンス』以降の後期作品は比較的評価が低い。その理由は、従来の研究者たちがコンラッドの創作技法が後期になって低下し、語りが平板になっていると考えているためだとする。コンラッドが本来得意でない恋愛描写や女性心理を物語の前面に押し出したために、本来の力を発揮できていない作品となり、才能が衰退したのだという主張がなされてきた。本博士論文は、従来前提とされた前期作品と後記作品の断裂を否定し、コンラッド作品に一貫して流れている「懐疑心」をキーワードに、それが特に後期作品においては、自己の前期作品への「セルフ・パロディ」という特徴となって結実していることを、力強く論じたものである。論文は、序論、本論 6 章、結論および注と参考文献から構成されており、全体で英文にて 174 ページのものである。

第 1 章と第２章ではそれぞれ『島の流れ者』(1896)と『ロード・ジム』(1900)の初期２作品が論じられる。これら２作品は海洋冒険小説でありながら、そこには西洋植民地主義への「懐疑」と批判的距離がみられるとする。第１章では、白人２人の登場人物の対決が彼らの失墜を招く一方で、それに至る語りが不必要な「引き延ばし」をしていると先行研究では論難されていたものを、本論ではその後に登場する優れた現地人と白人たちの対比を強烈なものにするために不可欠な語りの方法であったと、きわめてオリジナルな指摘がされる。第２章では、『ロード・ジム』の作品前半と後半の乖離が長らく批判されてきたが、本論は後半の語りが突如変化することで主人公ジムの英雄幻想への懐疑が惹起され、それをパロディ化する醒めた視座が確立するのであり、前半と後半での断裂はむしろそのようなセルフ・パロディが際立つために不可欠な語りの手法だったと結論付ける。

第３章と第４章ではそれぞれ『ノストローモ』(1904)と『密偵』(1907)が論じられる。これら２つの作品は場面がそれまでの作品で扱われた海ではなく都市である。海の世界の連帯感が「懐疑」と「パロディ」によって脱中心化されたのと同じように、都市の世界にも連帯感は不在であり、そこで展開される政治への「懐疑」が物語化されていると、説得的な議論が展開される。これら２つの作品では、ともにプロット構成に円環性がみられ、それがために、都市という連帯感がない世界では何も起こせないという無力感が現出するとする。『ノストローモ』

ではモニガム医師、『密偵』ではウィニーという従来あまり取り上げられない登場人物に敢えて焦点を当てることで、作品の本質を読み取ることができると主張される。観念にとらわれてがんじがらめとなったモニガム医師も、時の象徴であるグリニッチ天文台爆破をしようとする夫への徹底した無関心を保つウィニーも、２作品の構造の特徴である円環性の呪縛にとらわれていて、彼らを考察することで、都市への懐疑心があらわになるとする。

第５章と第６章ではそれぞれ『チャンス』(1913)と『放浪者』(1923)という後期作品が議論される。この２作品は再び海洋小説に回帰している。『チャンス』は、女性読者を念頭に置いて執筆された小説で、最近はフェミニズム批評の観点から女性主人公の成長を重視する再評価が進んでいるが、本博士論文では、この作品は女性の物語を前面に置きながらも、その底流に船乗りたち男性の物語を潜ませており、この語りのあり方により、前期とはまた違った形で、船乗りたちの連帯感や海洋小説のセルフ・パロディとなっていると結論付けられる。

第６章の『放浪者』論では、本博士論文に一貫してある、従来不自然だとされた語りの特徴を肯定的に再評価するという姿勢がみられ、物語における「脱線」を肯定的にとらえる。結末部の脱線があるおかげで、「フランス革命に纏わる死の影」というテーマと「ペイロール船長としてのプライドの揺らぎ」の２つの問題を同時に扱うことができるという主張は、本章を貫く議論であり、納得できるものである。ペイロール船長の出立を過度に劇的に描くことで、海洋小説のあり方に対して、自意識的に距離を保ちながら読者に提示しているという議論も首肯できる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ジョウゼフ・コンラッドの作品群から、海洋小説である初期２作品、都市を扱った中期２作品、再び海洋を舞台とした後期２作品が論じられ、先行研究で断裂があるとされる前期作品と後期作品に一貫する視点があるとし、それは「懐疑」「セルフ・パロディ」などの概念を導入することで明らかになるとした、斬新なものである。語りの技法の点では、「脱線」「偶然の多用」「引き延ばし」「複雑すぎるプロット」「直線的でない語り」など否定的評価を受けてきた点を敢えて取り上げ、それらが実は作品の一貫性に寄与するものだとした。強引な論理展開になる場合も若干あるが、説得のための粘り強さは高く評価できるものである。達意の英文で書かれており、議論の展開は丁寧に行われている。

また、テーマとしては「懐疑」や「セルフ・パロディ」に注目している点も評価できる。確固たる船乗りの連帯感、それらを無批判に描く海洋小説などに、コンラッドは本来船乗りであり価値観を共有するところがあるものの、懐疑の目を向けており、それこそがコンラッド文学の神髄であるとする議論は力強い。懐疑がきわまると彼は自らの作品や自分の描く女性主人公などの世界そのものすら「懐疑」するようになり、その「セルフ・パロディ」をやってのけるが、これこそがコンラッドの文学的価値だとするのは、全く独創的な議論である。

ただし、本論文において問題がないわけではない。語りの一貫性を強調するあまり、脱線そのものを楽しむことができる読みの柔軟性を失う場合がある。また、「懐疑」と「セルフ・パロディ」が鍵となる概念でありながら、その意味がしばしば異なっている場合や、章によってはそのテーマを扱う面が希薄になっているところもある。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。